

## 都市近郊農村における集落の機能

—横須賀市北下浦地区—

奥山育子

### 1. 研究の目的

村落における本格的構造変化は、高度経済成長期に始まった。特に都市近郊農村では、土地利用の変容のみならず、村落の構成員の異質化が進み、かつての農村生活を維持するために結ばれていた様々な関係や組織は、その機能を変容させている。本論文では、横須賀市北下浦地区をとりあげ、内部の野比・長沢・津久井の3地区における集落の自治組織、農業者集団、講集団の機能とその変容を把握することを目的とする。既存データの分析により各地区の宅地化・農業の展開等をとらえた後、聴取の範囲内で集落の機能を考えた。

### 2. 要約

①北下浦地区は横須賀市の農業の1中心地であると同時に、近年宅地開発の進展により人口が急増し、急速に変貌している。

当地区では津久井を中心に、野菜園芸、観光みかん園を中心とした農業を営んでいる。長沢・野比ではそれに対し、水田率も高く、経営規模が小さい。特に野比ではほぼ100%第2種兼業で、完全な市街地への漸移地帯として農業が残っているにすぎない。

②野比では最も早く、昭和30年代後半より宅地化が進み耕地は激減した。現在駅周辺に比較的まとまった商業地域も有する。長沢では少し遅れて40年代から大小住宅団地の造成が始まり、スプロール化が目立つ。津久井は海岸部の集落が密になった程度で、特に内陸部の農地は比較的保全されている。

③この様な変貌に伴い、一般に集落の諸組織は機能を変質させた。自治組織は役所の最末端事務処理の性格を帯び、構成員による寄合、共同作業は減少した。農業者集団でも、地域単位の生産班が

農協組織の末端として連絡機能を中心にし、その実質的活動は、専門別組合に譲った。年令別集団、講集団といった伝統的諸集団も集落の運営に携わることなく、衰退が著しい。

④最も早くより変貌を遂げた野比では、集落の共同作業の衰退や、各社会組織の崩壊も早かった。自治組織は、集落の全構成員による総会をもつことが不可能となり、祭りの実態等で、純粋な都市部の町内会の持つ性格に似てきている。農業者集団、講集団共に衰退は著しい。

長沢は野比よりは遅れたが、まず海岸部の集落で早くより旧来の社会組織が崩壊し始めた。内陸部は比較的停滞的であったが、近年の宅地化・兼業化の進展により、昭和50年代になって農業者集団、講集団等の組織が衰退している。

津久井は、この3地区の中で最も変貌が少ないが、海岸部集落では早くより共同作業、社会組織の衰退をみた。海岸部での人口増加は著しいが、元来土地が狭いため、新来者は概ねアパート居住者である。このために、いまだに地の者、土地所有者同士の結束が強く、新来者を集落内に完全に包摂していない。講集団が集落の運営に関与している例もみられる。

津久井内陸部は当北下浦の農業の中心である。特に最も奥にある牛込集落では、若干の変質はあったものの、旧来の共同関係が保持されている。共同作業の他、自治組織、農業者の諸集団共に実質的活動をしている。講集団も集落運営の一端を担い、その衰退は比較的少ない。加えて、観光みかん園を経営するみかん組合の成立とその実質的活動は、新たに集落内に強固な組織を作った。この様に重層的な諸組織の活動、及び血縁関係の中で、牛込では集落の結束がはかられ、しかも再強化される傾向にあるといえよう。